

2002年日本GUIDE/SHARE秋期大会

「eルネッサンスの展望 ~新しい情報戦略を探る~」



IBMのユーザー団体の一つである日本GUIDE/SHARE(以下、JGS)の主催による2002年日本GUIDE/SHARE秋期大会「eルネッサンスの展望~新しい情報戦略を探る~」が、2002年11月12日(火)に新宿のセンチュリーハイアット東京で開催されました。インターネットや通信技術が日々発展していく中、企業のIT部門が果たす役割にもさまざまな変化が起きています。今回の大会では、そんな企業のIT部門を取り巻く今後の課題に焦点を当てた、管理者向けのプログラムが組まれました。

さまざまな示唆に満ちた講演・発表

今大会のオープニングは、新世代のコンテンツ言語Curlで作成された映像で幕を開けました。このようなこだわりにもJGSの進取の精神が見て取れます。



北城 格太郎

続く、日本アイ・ピー・エム 代表取締役会長 北城 格太郎による基調講演「e-ビジネスの新たな展望」では、e-ビジネス・オンデマンドの展望についての発表がありました。

北城は、オンデマンド・ビジネスが可能になるためには、あらゆる状況に素早く対応できる「即応性」、必要に応じて作ることができる「柔軟性」、他社との差別化による「集中化」、24時間365日稼働の「持久力」が必要と語ります。そのためには、オープン・スタンダードなオープンな基準でのシステム開発(XML、Linux)と、複数サーバーを通信線で結んだ大きな分散処理とインターネット上の仮想的グローバル・コンピューティング「グリッド・コンピューティング」、生命体のような自律できるシステム「オートノミック・コンピューティング」が必須と述べます。

その北城の講演に対応している発表が、日本アイ・ピー・エム 取締役 岩野 和生による「Autonomic Computing ~次世代のe-ビジネス・インフラストラクチャーに必須のオートノミック・コンピューティング~」です。この発表では、オートノミック・コンピューティングの具体的な構想と現在の状況を示しました。



岩野 和生

株式会社武蔵野 代表取締役社長 小山 昇氏は、経営者としての立場から、ITを活用した職場環境を独特の話し方で生き生きと語りました。



小山 昇氏

続いて、オフショア開発について二つの

発表が行われました。e-ビジネス・オンデマンドの講演・発表と並び、本大会の「核」ともいえる発表だったと思います。まずは、株式会社サン・ジャパン 代表取締役社長 李 堅氏の「中国ITパワーの効果的な活用について」です。自らの経験と実績に裏付けされた、説得力のあるオフショア開発の問題点についての発表でした。TIS株式会社 マルチメディアビジネス 第3部主任の松井 哲也氏は、JGSオフショア開発について、上海での研究活動の成果を発表しました。

本大会の最後の発表は、芝浦工業大学学長の江崎 玲於奈氏の記念講演です。ご自身の研究者・教育者としての半生を、ユーモアを交えて振り返りました。「真の教育者とは自分の遺伝情報を最大限に活用するようなプログラムを書くことができる能力を身に付けること」という発言は、さまざまな示唆に富んだ言葉ではないでしょうか。



江崎 玲於奈氏

オフショア開発の問題点と可能性

現在のIT業界において、中国人技術者は重要な力となっています。しかし、その一方で中国との会社とのやり取りにおいて、さまざまな問題が発生していることも事実です。本大会でその実態を考察する講演が複数あったのは、必然といえるでしょう。その詳細をご紹介します。

株式会社サン・ジャパン代表取締役社長 李 堅氏は、オフショア開発の失敗と成功のポイントを総括し、その成功には欠かせない「中国と日本の常識の違い」について語りました。

まず、中国のITパワーを活用する側面として、「オフショア化によるコスト削減」「優秀な人材の確保」「中国進出による新たな布石」ということを挙げました。そして、中国人エンジニアは、「数学的にロジックに強い」という特徴を挙げました。

日本から中国へのオフショア開発は既に定着していると述べ

た上で、「それでも失敗してしまう理由」を、「基本設計の丸投げ」「開発環境の準備不足」「品質問題の発生」「言葉が通じないこと」と説明しました。「結果として、最終的には日本で作り直すしかない状況になってしまうこともありました」と李氏は言います。



李聖氏

そして失敗のパターンとして、幾つかの例を挙げました。まず、技術の低さや約束していた人員が確保できず、プロジェクトの前提が崩れてしまう「プロジェクト崩壊型」、中国側の設計を過信してしまう「上流設計不足型」、さらには言葉による意思疎通が困難なため、説明不足から大きなミスが発生しても反応がないままプロジェクトが進行してしまう「コミュニケーション・ギャップ型」などです。ほかにも「テスト不足型」「生産読み違い型」などの例を挙げました。

これらの失敗の共通点として、「(相手の会社をよく知らないうちに)いきなり取引を始めてしまうこと」「中国人技術者の「何でもできる」という言葉を信用してしまうこと」「見た目の単価の安さにひかれてしまうこと」「日本の協力会社の感覚で付き合ってしまうこと」「中国SEと日本のSEを同一視してしまうこと(中国人SEは、数学系・ロジックに強いが細かいミスなども多い)」「発注者の管理能力」などと語りました。

そして、オフショア開発の成功のキー・ポイントとして「インセンティブ制度の導入」「グループ基盤の共通化」「中国・日本で共通の技術基盤を持つ」「現地の経営者と信頼関係を結ぶ」などの具体例を挙げました。「社会との信頼と人材の確保」こそが、さらなる成功を約束するとも語ります。

李氏は発表の最後に、「複合的な視点でもっと豊かな経営」こそが、国内の企業に求められているという力強い助言で締めくくりました。

続くTIS株式会社 マルチメディアビジネス第3部 松井 哲也氏は、中国・上海の企業で視察したシステム開発におけるJGS オフショア活用の現状と課題を報告しました。訪問・視察した企業は、日本から資本を投入し、社内規定やルールを導入することで成功している企業です。

得意分野としては、「オープン系プラットフォームでのシステム開発」や「比較的小規模なシステム開発」やるべきことがはっきり



松井 哲也氏

しているプログラミングやテスト」などを挙げ、反対に経験の少ない分野として、「大規模開発のプロジェクト・マネジメント」「要求分析・基本設計など、詳細設計よりも上流の工程」などを挙げました。とはいえ、上流工程の参画にも意欲的だとも述べます。また、「就労意識・雇用体系ともに、欧米スタイルのビジネス・スタイルが定着しており、それが生産技術と品質を支えています」とのことでした。

さらに、言語と文化の相違の問題や契約上の諸問題を語り、「それでも、なぜ中国なのか」と説明します。まず、価格競争力を得るため、安価な賃金で雇用できる技術者を求めている日本企業の「需要」。そして、現在、中国は大量の技術者を排出しているという「供給」。その上、待遇が中国一般就労者の5倍ということ、中国政府がIT産業を重点フォロー産業として力を入れている「政策」。漢字文化圏である日本への中国の理解と関心の高さによる「文化」などを挙げ、中国におけるオフショア開発の必要性と重要性について語りました。

松井氏は成功のポイントとして、「信頼できる会社を育てる」「方法論は日本から持ち込む」「管理/支援要員をアサインする」「Q&Aの回答期限をお互いに守る」「レビューをプロセス化し実施する」「あいまいさを排除する」「翻訳時の混乱を回避するために、コミュニケーションは日本語で行う」「契約面でトラブルが発生しないようにする」などを挙げて、発表を終えました。両氏の発表とともに、オフショア開発の問題点を極めて鋭くまとめた発表でした。



これからのe-ビジネスを多角的に検証

今大会は、管理者・経営者に向けて、主に「e-ビジネス・オンデマンドの展望」と「オフショア開発」という二つの側面から、これからのe-ビジネスのあり方を多角的に検証し、かつ提示した内容でした。企業のIT部門の果たすべき役割への示唆も多く含まれていたと思います。またJGS総会も同時に開催され、これからのJGSの方向性も示されました。懇親会も行われ、参加者・IBMとの親交も深められ、秋期大会は盛況のうちに終了しました。

